

氏名(本籍)	お か 岡	み ち よ 美智代(千葉県)
学位の種類	博 士(医 学)	
学位記番号	博 甲 第 2,179 号	
学位授与年月日	平 成 11 年 3 月 25 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当	
学位論文題目	血液透析患者の保健行動と生活満足の因果モデル —共分散構造分析による検討—	
主 査	筑波大学教授	医学博士 加 納 克 己
副 査	筑波大学教授	医学博士 紙 屋 克 子
副 査	筑波大学教授	医学博士 竹 尾 恵 子
副 査	筑波大学助教授	医学博士 永 瀬 宗 重

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

本研究は、血液透析患者の保健行動と生活満足の因果モデル(A Causal Model of Treatment Regimen Adherence and Life-Satisfaction in Hemodialysis Patients: ALSHP)を作成し、保健行動と生活満足に影響を与える要因を明らかにするとともに共分散構造分析(Covariance Structure Analysis)を使ってALSHPと実際に調査したデータとの適合性を検討することを目的とする。

(対象と方法)

対象者は、透析導入後1ヶ月以上経過している外来通院血液透析患者209名(平均年齢:56.2±12.1歳)であり、平均透析歴113.0±76.3ヶ月である。原疾患は慢性糸球体腎炎が47.4%であった。臨床検査データは、血清尿素窒素(BUN)、血清リン(P)、血清カリウム(K)24時間透析間体重増加量(24-IWG)を用い、横断的調査を実施した。ALSHPの分析には、複数変数の因果モデルの全体評価を行うことができる共分散構造分析を使用し、統計プログラムパッケージSAS(Statistical Analysis System)によって解析した。

潜在変数と観測変数である調査内容は、(1)保健行動(71):食事管理行動(X1)、(2)生活満足(72):透析患者の生活満足(X2)、(3)自己決定(73):セルフケアに関する自己決定(X3)と患者-医療者関係における自己決定(X4)、(4)自己効力(74):透析患者の食事管理の自己効力(X5)、(5)医療者からの支援(81):医師からの支援(X6)と看護婦からの支援(X7)である。

ALSHPの変数抽出と仮説因果モデルの作成には、透析患者の保健行動を探求するモデルとしてふさわしい患者保健行動の相互作用モデル(The Interaction Model of Client Health Behavior)を理論枠組みに用いた。

(結果)

1. 食事管理行動が有意($p < 0.05$)に良好であった患者特性は、年齢が65歳以上であること及び透析歴が短いことであった。共分散構造分析の結果、保健行動の良好さは、自己効力(self-efficacy)が高いことから直接効果を受けていた。また、医療者からの支援が低いと自己決定が必然的に高くなり、次いで自己効力が高くなり、保健行動が良好になるという間接効果を受けていた。

2. 生活満足が有意($p < 0.05$)に良好であった患者特性は、有職者と同居者がいることであった。共分散構造分析の結果、生活満足が高いことは、医療者からの支援が高いこと及び自己決定をしていることから直接効果を受けていた。また医療者からの支援が低いと自己決定が高くなり、生活満足が高まるという間接効果を受けていた。

た。

3. ALSHPの適合性は、以下の潜在変数の因果モデルで良好であった。

$$\eta_1 = \beta_{14}\eta_4 + \zeta_1, \quad \eta_2 = \beta_{23}\eta_3 + \gamma_{21}\xi_1 + \zeta_2$$

$$\eta_3 = \gamma_{31}\xi_1 + \zeta_3, \quad \eta_4 = \beta_{43}\eta_3 + \zeta_4$$

(考察)

ALSHPの適合性は、透析患者の保健行動と生活満足を説明するモデルとしてほぼ適切であった。

自己効力は行動実施に先行する要因といわれており、透析患者においても適応することが分かった。教科書的ではない個人のライフスタイルに合わせたセルフケア方法を決定することは、自己効力を高め、保健行動や臨床検査データが良好になることが示唆された。

生活満足については、透析ストレスが医療者からの支援によって緩衝され満足感が高まると考えられる。また、自己で決めたという満足感が生活満足にも繁がると思われる。医療者からの支援の低さが自己決定の高さに影響を与えていたが、この結果は現在の医療の支援体制の貧しさを反映したものと思われる。

透析患者の保健行動と生活満足を同次元で調べた結果、医療者からの支援と自己決定は、健康行動と生活満足の両変数に影響を与えており、透析患者を支援する上で今後注目すべき要因であることが示唆された。

審 査 の 結 果 の 要 旨

血液透析患者の保健行動と生活満足の因果モデルを作成し、保健行動と生活満占到影響を与える要因について共分散構造分析を行った結果、保健行動の良好さは自己効力が高いことから直接効果を受け、また生活満足が高いことは医療者からの支援が高いこと及び自己決定していることから直接効果を受けていたことが明らかになった。本研究は保健行動と生活満足という社会医学的な視点に自己決定や自己効力という新しい概念を導入し、其の因果モデルを見出したことは評価できる。また、保健行動のモデルを理論枠組みに使い、行動科学的な手法を用い、透析患者の保健行動と生活満足の因果モデルの適合性を検証したことも評価に値する。今後は、この因果モデルを理論枠組みに用いた保健行動を高めるプログラムの開発並びに介入研究によるプログラムの効果性の検証に期待したい。

よって、著者は博士（医学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。